

**主 題：ピレモンへの手紙から学ぶ2 —パウロの愛と配慮—**  
**聖書箇所：ピレモン 8-25節**

9月にもピレモンへの手紙から学びをしましたが、きょうは8-25節「パウロの愛と配慮」ということで皆さんと一緒に学んでまいります。この手紙は、パウロが書いた手紙の中で一番短い手紙で25節しかありません。しかし、この手紙が聖書の中に加えられているということは、神様がこの25節を通して私たちに神の真理を知らせようとしていることをはっきりと知ることができます。このピレモンへの手紙の登場人物は、パウロ、ピレモン、そしてオネシモの3人です。今回は、パウロとピレモンについて学びました。最初にピレモンについて少し復習してみたいと思います。

**A. ピレモンについて**

**1. ピレモンは信仰と愛とに富んでいた 5節**

まず4-5節、「4 私は、祈りのうちにあなたのことを覚え、いつも私の神に感謝しています。5 それは、主イエスに対してあなたが抱いている信仰と、すべての聖徒に対するあなたの愛とについて聞いているからです。」と、パウロはピレモンの信仰と愛について神に感謝をしていると言っています。主イエスに対してあなたが抱いている信仰、すべての聖徒たちに対するあなたの愛、これを神に感謝しているのだとパウロは言います。ということは、このピレモンという人物は信仰と愛に富んだ人物であるということを私たちは知ることができます。

**2. ピレモンの働き 7節他**

また7節には「それは、聖徒たちの心が、兄弟よ、あなたによってカづけられたからです。」とあります。ピレモンは群れの中でさまざまな働きをしていました。前回、この「カづけ」というのは英語の「リフレッシュ」ということばが使われているとお話ししました。このことばは「元気にする」とか「生気を与える」という意味を持っています。ギリシャ語では「アナパウオー」ということばが使われているのですが、実はこのことばはほかの箇所でも使われています。皆さんよくご存じのマタイ11:28では「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」の「休ませ」ということばがこのことばです。またⅡコリント7:13では、この「アナパウオー」は「安らぎを与え」と訳されています。

**1) 聖徒たちを励ます（弱っている心を奮い立たせる） 7節**

ここからこのピレモンという人物は聖徒たちを励ましていた、弱っている者の心を奮い立たせる働きをしていたことがわかります。

**2) 霊的成長を促す（徳を高める） 7節**

また群れの人たちの霊的成長を促す働きをしていたこともこのことばから知ることができます。

**3) 愛と善行を勧める 5・6・7節**

また、ほかの箇所からこのピレモンがどういう働きをしていたかを推し量ることができます。5-7節からはピレモンは愛と善行を群れの人たちに勧めていた。

**4) とともに集まる（交わり） 2・6節**

また2節、6節からとともに集まる、交わりを持つ、そのようなことを実践していた。

**5) 互いに仕え合う 20節**

そして20節からは互いに仕え合う者であったことも知ることができます。

**6) 謙遜と柔和（自分を低くし、相手を思いやる心） 21節**

21節からは彼は謙遜と柔和を持った人物であったこと、自分を低くして相手を思いやる心を持った人物だったことがわかります。

**7) 寛容を示す（相手を許す心） 16・17節**

また寛容な人であったこと、それは16-17節、彼は相手を許す心を持っていたことがわかります。

**8) 互いに忍び合う（忍耐する心） 17節**

また忍耐する者であったこと。

**9) 霊的一致を保つ 1・2節**

そして彼は群れの霊的な一致を保つ働きをもしていたことが1節あるいは2節を通して知ることができます。

ピレモンは信仰と愛に富んでいて、群れの中で本当にさまざまな働きをしていた人物でした。

**B. オネシモ 「役に立つ者」の意**

きょうここにもうひとりの人物が出て来ます。オネシモという人物です。このオネシモという名前は「役に立つ者」という意味です。10節の欄外中央を見ると米印がふたつついていて下の方に「有益な」と書かれています。オネシモというのは「有益な者」、「役に立つ者」という名前だったのです。

### 1. ピレモンの奴隷 11・16節

このオネシモはピレモンの奴隷でした。11・16節からそのことを知ることができます。

### 2. パウロと出会い回心する 10節

このオネシモは主人であるピレモンのところからある事件を起こして逃亡したのです。そして彼はローマへ行き、オネシモはローマでパウロと出会い、そこで回心したのです。それが10節「獄中で生んだわが子オネシモ」ということばで表わされています。これをギリシャ語そのままに訳すと、「私は獄中で彼の父となった」となります。オネシモはクリスチャンとなったのです。

### 3. 忠実なクリスチャンとして成長 11・13節

そして彼は忠実なクリスチャンとして成長しました。11節、13節を読むとそれがわかります。

パウロは12節で「彼は私の心そのものです。」と言っています。またこのピレモン書と関係の深いコロサイ4：9で、パウロは「また彼は、あなたがたの仲間のひとりで、忠実な愛する兄弟オネシモといっしょに行きます。このふたりが、こちらの様子をみな知らせてくださいでしょう。」と言います。ここでは「忠実な愛する兄弟オネシモ」と書かれています。オネシモは救われた後、忠実なクリスチャンとして成長したのです。そしてパウロはこのオネシモをもとの主人であるピレモンへ返そうとするわけです。それが12・16・17節に書かれています。

先ほどお読みしましたコロサイ4：9でも「このふたり（テキコとオネシモ）が、こちらの様子をみな知らせてくださいでしょう。」と書かれています。パウロはこのオネシモを元の主人であるピレモンのところへ返そうとするわけです。オネシモは奴隷でした。ここではギリシャ語の「デューロス」ということばが使われています。この奴隷というのは個人的な自由や権利を一切持たず、主人の支配、指示に完全に無条件に服従する者です。奴隷は主人の所有物、主人の財産です。だから彼らは売り買いされました。主人からほかの主人に貸すこともされました。またほかの主人が持っている奴隷と交換することもできました。また、主人が自分の息子に相続財産として分け与えることもできました。彼らは物だったのです。そういうものとして奴隷は生きていたわけです。オネシモは主人のもとから逃亡していました。この当時のローマの法律では逃亡した奴隷は主人が死刑にする権限を持っていたと言われていています。だからピレモンはオネシモを死刑にする権利があったのです。またこの逃亡している奴隷をかくまうことも、当時の社会制度に反することでした。かくまっではいけなかったのです。だからパウロがこのオネシモをずっと自分のもとに置かなかったことも当時の社会制度から理解することができます。

### C. パウロの愛 15-19節

さて、10節に書かれている「獄中で生んだわが子オネシモ」、このオネシモを通してパウロの愛がどのようなものであったのかを学んで行きます。

#### 1) 15節

15節に「彼がしばらくの間あなたから離されたのは、たぶん、あなたが彼を永久に取り戻すためであったのでしょう。」とあります。日本語では「たぶん」ということばが文の真ん中に使われていますが、ギリシャ語ではこのことばは文頭に来ています。だから、「たぶん、間違いなく、彼がしばらくの間あなたから離されたのは、」と続いて行くわけです。この「離された」ということばは、オネシモがピレモンから離されたということで、これは受け身で書かれています。だれかがこのことなしたということです。それは神であり、オネシモが主人であるピレモンのもとから逃亡したことをも神の計画の中にあつたことを私たちに教えています。

同じような例を創世記50：15-21、あのヨセフが兄弟たちに売られてエジプトに行く話の中で見ることができます。20節「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。」とあります。ヨセフが兄弟たちによってエジプトに売られたことも、神の計画のうちにあつたことだとみことばを通して見るすることができます。

そして15節「しばらくの間」と少し後ろにある「永久に」とが対になっています。それは一時的に失ったものを永久的に獲得するものへと変えてくださった、一時的な損失を永久的な獲得へ変えるという神の計画だったということです。パウロはローマ8：28で「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益ととしてくださることを、私たちは知っています。」と言っています。このオネシモの事件も神の計画にあつた、そしてそれはすべての者にとって益となる、そのようなことであつたと私たちは知るわけです。

#### 2) 16節

16節には「もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、すなわち、愛する兄弟としてです。特に私にとってそうですが、

あなたにとってはなおさらのこと、肉においても主にあって、そうではありませんか。」と書かれています。15節の最後の方に「取り戻す」ということが使われています。16節ではその内容の説明をしています。ピレモンとオネシモの以前の関係は主人と奴隷という関係でした。でも今は主にあって愛する兄弟として「取り戻す」ことになったとパウロは教えるわけです。ピレモンもオネシモもパウロによって伝道されました。10節では「獄中で生んだわが子オネシモ」、19節には「あなたが今のようになれたのもまた、私によるのですが」と書かれています。パウロはピレモンも、またオネシモも生みました。パウロにとってはふたりとも愛する兄弟であり、子どもだったのです。だから、「私にとってそうです」と書いた後に「あなたにとってはなおさらのこと」と記しています。以前は主人と奴隷という関係だったけれども、今は兄弟として深いつながりを持つ者となった。ピレモン、それはあなたにとって素晴らしいことではないですか、このようにパウロは言うわけです。「肉においても主にあって」というのは、ピレモン、あなたは家族の一員としてオネシモを取り戻し、また霊的な兄弟としてもオネシモを得たということではないですかとパウロは教えているわけです。

### 3) 17節(17-19節がこの手紙の中心)

この後の17-19節がこのピレモンへの手紙の核心部分です。17節の冒頭は「ですから」ということばで始まっています。これは前節までのことを受けてこれからの話が出て来るわけです。それはオネシモがクリスチャンとなった、オネシモが愛する兄弟となったことを受けてということです。17節「もしあなたが私を親しい友と思うなら、私を迎えるように彼を迎えてやってください。」と、パウロはピレモンと私の関係は「親しい友」だと言っています。この「親しい友」というのはギリシャ語では「コイノーノス」ということばが使われていますが、このギリシャ語のことばの意味するものは「信仰の同士」です。パウロは1節で「愛する同労者ピレモン」と言っています。パウロはピレモン、私とあなたは親しい友であると。だからあなたも親しい友として、信仰の同士としてオネシモを迎えてほしいとパウロは17節で言うわけです。この17節に関して、あの有名なカルヴァンは、「もし人が神がその子どもたちの集まりに加えてくださった兄弟を仲間として恥じるなら、それは高ぶりのしるしである」と註解しています。もし私たちが、神様が私たちの群れに加えてくださった愛する兄弟姉妹を仲間として恥じるなら、それは私たちの高ぶりのしるしだと言うのです。

### 4) 18-19節

#### (1) イエス・キリストの十字架

そしてパウロは18-19節で、「もし彼があなたに対して損害をかけたか、負債を負っているのであれば、その請求は私にしてください。:19 ……私がそれを支払います。」と言っています。このパウロの行為を見る時、私たちはある人を思い出します。それはイエス・キリストです。イエス・キリストは私たち人間の負債——罪をすべて負ってくださって、私たちの身代わりとなってあの十字架に架かられました。パウロがここになそうとしている行ないは、まさにあのイエス・キリストが私たちのためになしてくださった行為と私たちはダブらせて知ることができます。

イザヤ53:4-6にこう書かれています。「:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」。イザヤはここでイエス・キリストがどのような者であったのかを教えてください。

またパウロもローマ5:8で「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」と言います。私たちがまだイエス様と敵対していたその時に、イエス様は私たちひとりひとりの負債を負って死んでくださった。それによって、私たちは永遠のいのちという素晴らしいものをいただくその道を知ることができた。またそれによってイエス様は私たちひとりひとりに対する愛を明らかにされている。

ペテロも同じことを私たちに教えます。Iペテロ2:24で「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」と言います。イエス・キリストは私たちの負債をすべてその身に負ってくださったのです。

ヘブル書の記者はヘブル9:28で「キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられました」と書き記しています。そして、ルカ23:34「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」と、イエス様は十字架上で神に対して、お父さんに対して、自分を十字架に架けた者たちを許してやってくださいと叫んでいます。パウロがこのオネシモのためにオネシモの負債をすべて負います、私が支払いますと言ったこの行為は、まさにイエス・キリストが私たちひとりひとり

の罪を負って十字架に架かれた、あの行為です。

## (2) パウロの愛の姿

パウロの愛の姿を私たちはIコリント12:3-1から知ることができます。パウロは愛について「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。」と私たちに教えます。この「よりすぐれた賜物」、これは愛です。そして13章でパウロは愛について教えます。そして14:1でまた「愛を追い求めなさい。」と書き記しています。愛の本質について、パウロはIコリント13:4-8でこのように私たちに教えます。「4 愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。5 礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、6 不正を喜ばずに真理を喜びます。7 すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。8 愛は決して絶えることはありません。」、そして13節「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」とパウロは言います。これがパウロがオネシモのために示した愛の姿です。

そしてこのピレモン19節を見ると、「この手紙は私の自筆です。」と書かれています。前回も学びました。この手紙はパウロが書いた手紙です。しかしこの意味するところは、この負債に関係があります。オネシモの負債を私が払います、負債の債務を負っているパウロが署名しますという意味です。私たちもだれかから物を借りたりすると、書類に署名し捺印をします。確かに私が借りたという証明に署名捺印をするのです。それと同じ意味を持って、オネシモの負債をすべてパウロが負っている証拠に、ここで「この手紙は私の自筆です。」と言うわけです。パウロは自身の愛をオネシモを通して行ないをもって明らかにしました。

## D. パウロの配慮

しかし、オネシモはピレモンの奴隷でした。だからパウロはピレモンに対しても配慮を怠ることがありませんでした。私たちはそのことを8-10節、14節、20-21節から少し学んでみたいと思います。

### 1) 8-10節

8-10節には「8 私は、あなたのなすべきことを、キリストにあつて少しもはばからず命じることができるのですが、こういうわけですから、9 むしろ愛によって、あなたにお願いしたいと思います。年老いて、今はまたキリスト・イエスの囚人となっている私パウロが、10 獄中で生んだわが子オネシモのことを、あなたにお願いしたいのです。」と書かれています。この当時、パウロは初代教会の第一人者でした。言ってみれば最高の権威があったということです。そのパウロがピレモンに伝道したことによってピレモンは信仰に至ったのです。だからパウロとピレモンの関係を考えると、パウロはピレモンに命じることができた8節に書かれています。でもパウロはそうしなかったのです。パウロは上からの命令ではなくて、ピレモンの感情、思いによく配慮して、ピレモンがオネシモを自分の奴隷としてではなくて、同じ救われたクリスチャンの兄弟として受け入れてくれるようにと懇願するわけです。それが9節「あなたにお願いしたいと思います。」、また10節では「あなたにお願いしたいのです。」と書かれています。パウロはピレモンの心のうちを恐らくよく知っていたのでしょう。だからピレモンに深い配慮を払ってこのように懇願しています。

### 2) 14節

そして14節を見ると、「あなたの同意なしには何一つすまいと思いました。」。奴隷の所有権は主人のもので、ということはオネシモの所有権はその主人であるピレモンのものです。だからパウロは上からの強制でオネシモを扱うのではなくて、信仰をもってオネシモに対応してほしい、このように言うわけです。違うことばでこれを表現するならば、愛の実践をもってオネシモを受け入れてほしいとパウロは言うわけです。ヨハネはIヨハネ3:16-18でこの愛の実践がどのようなものか私たちに教えています。Iヨハネ3:16では、それは犠牲を伴っていること、17節では相手を思いやる心を持って、そして18節では行ないと真実を持って、正しい動機を持って、そのような思いで愛の実践をすることが私たちに教えられています。パウロもピレモンに愛をもってオネシモに接してほしいと言うのです。

### 3) 20-21節

さて、パウロは最後に20-21節で「20 そうです。兄弟よ。私は、主にあって、あなたから益を受けたいのです。私の心をキリストにあつて、元気づけてください。21 私はあなたの従順を確信して、あなたにこの手紙を書きました。私の言う以上のことをしてくださるあなたであると、知っているからです。」と書き記しています。私たちはピレモンが愛の人であることは5節で知りました。7節でパウロはピレモンの愛から喜びと慰めを受けたと言っています。そして20節でパウロは「私の心をキリストにあつて、元気づけてください。」とピレモンに言います。パウロは、ピレモンがオネシモをキリストにある兄弟として心から受け入れること、それは今獄中にある私パウロの心にまた喜びと励ましを与えることだと言っています。そして21節で「あなたの従順を確信して」と。「従順」はクリスチャンの大きな特徴です。最も重要な従順は主に対する、神に対する従順です。しかしそれと同時に人に対する従順も大切なことです。パウロはこの21節でピレモンが主に従うよう

に、オネシモのことにに関してパウロの行為を快く受け入れてくれることを心から信じていると私たちに教えます。

私たちは25節しかないこの短いピレモンへの手紙を2回にわたって見ました。この学びを通して私たちが知らなければいけないことは、私たちの愛の行為は神に対して、また愛する兄弟姉妹に対して、周りの人たちに対してどういうものなのかということです。私たちはさまざまな働きをする時に、主のために喜んでそれをなしているのか、あるいは愛する兄弟姉妹のために労する時に、それを喜んでなしているのかどうか、もう一度私たちの信仰を吟味しなければいけないということをこの手紙から教えられます。

またもうひとつ、私たちは相手に何かをする時、相手にことばを出す時、私中心の思いからではなく、よく相手に配慮した思いでことばと行ないを表さなければいけないということも知ることができます。どちらにしても、この短い手紙は私たちが信仰生活を送る上で非常に大切なことをしっかりと教えてくれています。だから私たちはこの短い手紙をもう一度読んで、神が私たちに神の真理をどのように教えているのかをしっかりと知る必要があると思います。

#### **E. 考えてみましょう**

1. 主のために働くことを「喜び」としているだろうか？
2. 兄弟姉妹のために労することを「喜び」としているだろうか？
3. 自己中心の思いではなく、相手のことを気遣っているだろうか？
4. 「あなたは信仰の人ですか。また愛の人ですか。」と聞かれたら何と答えますか？「No」ならば、何が欠けていると思いますか？